

秋月悌次郎の修行時代 — 持続する志五

中西達治

一 秋月悌次郎は、会津藩士丸山四郎右衛門胤通の二男として、文政七年（一八二四）七月二日に生れた。幼名四郎次郎、母は杉本氏の女である。（名は、イノ。この時代は、夫婦別姓だったため、系図上では、こういう表記になっている。）天明五年（一七八五）十月晦日生れの父はこの時四十歳、食禄百五十石で譜代の世臣であった。文化十二年（一八一五）八月廿五日生れの兄伴助胤昌と二人の姉があり、のちに弟三郎胤家が生まれている。いずれも同母であるが、兄胤昌は、二人の姉の間に生まれており、五人兄弟とはいえかなり大きな年齢の差がある。年齢の近い兄弟姉妹の関係とは少し異なる関係が彼の生育環境にはあったのである。

彼は何時の頃からか、秋月を名乗っている。不思議なことに弟三郎も秋月を名乗っており、丸山家は嗣子胤昌以外の男子は新しい姓を名乗っている。この当時、会津藩ではこうした事例が許されていたのであるが、非常に珍しいことと云えるだろう。養子になるなど既存の藩士の家である秋月家を継いだわけではないから、彼の藩内での身分は、相変わらず丸山家の居候という位置づけである。こうした武士の家庭の二、三男は、他の藩と同じように諸生と呼ばれる。後年のことであるが、松平容保が京都守護職に任命され、長い修学期間を終えた彼が表舞台に出てきた頃は、兄が亡くなっていて、兄の子が家督相続していたから、「丸山五八郎叔父」と紹介されている。藩外の人達か

らも、「此悌次郎といへるハ（中略）兄懸りなるか（筆者注、兄が病死する前後のこと）近来小給ニ而儒官ニ被召出し由」（中根雪江『再夢紀事』）という形で見られていたのである。このことは、彼のその後に生き方に非常に大きな影響を及ぼすことになるが、その点についてはその時々に触れることにしたい。

二 幼少年期をどのように過ごしていたかについては分からない。明治二十三年四月、悌次郎は、自分の人生の途上で出会い愛用した十振りの刀剣に即して「刀史」という文章を書いた。その中の第二に「追遠刀」がある。彼の幼年時代、父親は会津の刀匠中条陸奥守道辰と親しかった。いつも飲酒歓談し、刀を幾振りも作らせた。その際何度も鍛え直させ時には刑人の試し切りをさせた。追遠刀はそのうちの一振りだ、天保二（一八一三）年の作である。この刀は天保十三年彼が江戸に遊学する際父が授けてくれたものだとなる。刀匠とその顧客である武士との私的な交流の様子を物語るエピソードで、武士の家庭の雰囲気分かる。ただし、先にも述べたように彼は嫡男ではない上に、江戸に出たときにはすでに秋月姓になっているので、どういう形で丸山家にいたのかは分からない。

会津藩は身分制度が厳格で、羽織の紐、襟の布の色を身分に応じて変えるといういわゆる紐制、襟制をとっており、市中で出会ったとき

級の差は藩士の生活のすみずみまで行きわたっていた。子供の世界でもこのことは徹底していた。

明治三十三年（一九〇〇）、中国北京における義和団の乱の際、日本陸軍を指揮して欧米諸国からその武勇と礼節を称賛された、北京駐在武官柴五郎陸軍中佐（後年陸軍大将）という軍人がいる。彼は戊辰戦争当時まだ八歳ながら会津藩士の兄柴太一郎にしたがって戦い、斗南に移住したという経歴の持ち主であるが、少年時代の思い出を次のように語っている。

藩の規律はきびしく躰けられ、寒けれども手を懐にせず、暑けれども扇をとらず、はだぬがず。道は目上にゆずり片寄りて通るべし。門の敷居を踏まず、中央を通るべからず。客あらば奴僕はもちろん、犬猫の類にいたるまで叱ることあるべからず。おくび、くさめ、あくびなどすべからず、退屈の体なすべからずと、きびしく訓練されたり。

近來、武士といわば、すぐ大声を發し、酒飲みて狼藉し、斬り棄て御免のごとく伝うるものもあるも、はなはだしき誤りなり。かかるものは浪人の成れの果てか、やくざに類するものにて、武士一般を語るものにあらず。

金銭につきても、きびしき心得ありて、自ら手にすることを許されず。年に一回盛夏のころ、鎮守諏訪神社の祭礼の日にかぎり銭を使うことを許され、白玉の買ひ食いもできたりとはいえ、銭の支払いは自ら勘定して渡すを禁ぜらる。かならず銭入れのまま商人に渡し、彼をして取らしむる習慣なり。白玉六個入り四文、豆鉄砲、お面など、それぞれ十文ほどなりしと記憶す。

万延元年（一八六〇）生まれの彼と悌次郎とは親子程も年の差があるが、子供達の様子にそれほど大きな変動はなかったと思われる。

三

禄高百石以上の士中と称する階級の子弟は、十歳になると藩校日新館に入学が許される。先ず素読所（小学）に入る。十三歳から書寮で書道、十五歳からは武芸の稽古が始まる。弓馬・刀・槍は必須だが流派の選択は自由であった。この外医学、神道、算術などの選択科目も設けられていた。ここでは、長男二男などの区別はなく、等しく教育の機会が与えられており、実力に応じて、上級への進学が保証されていた。

日新館は、寛政十一年（一七九九）着工、享和元年（一八〇一）に完成した、敷地約八千坪、建物の面積四千坪、入門から専門的内容まで文武両道の教育を施す総合教育施設である。命名の由来は、『書経』湯盤銘の「日日新而又日新」、『易経』の「聖徳謂之日新」という言葉に基づいている。講堂の大成殿を中心に左右に教場があり、講堂の背後に武場を設けて、弓馬劍槍を教えた。中庭には大きな池を掘って水練、游泳術を教える。教場には五経に因んだ、尚書塾、三礼塾、毛詩塾、二経塾という名がつけられており、その外に東西書寮・和学神道雅楽方・医学寮・礼式算術天文方・神道と学方の教室も設置されていた。入り口には大鼓を吊るし、生徒の登下校はすべてこの太鼓によってなされた。会津の儒学は、藩祖保科正之が山崎闇斎を師として以来、純然たる朱子学の崎門学派の伝統を受け継いでいた。日新館が整備された当時は、家老田中玄宰の肝煎りで招聘した荻生徂徠派の古屋昔陽の教学により、徂徠派の古学が藩学を中心となつたが、七代容衆の代になると藩祖正之以来の朱子学への回帰が提唱され、文化七年（一八一〇）には正式に昔陽が唱導した古学は排除された。藩法では、才能のあるものは、二・三男であっても取り立てられることがある一方で、文武二芸に達していない者は減禄されるといふ制度があつたといふ。^{注3}（岡千仞『在臆話記』による。）藩士の子弟はこぞつてここに通

学した。

天保四年（一八三三）、十歳になった悌次郎は他の藩士の子弟と同じく藩校日新館に入り尚書塾に学ぶこととなった。尚書は、四書五経の一つ書経のことである。塾で野村政記の教えを受け、藩儒であった安部井弁之助や宗川勇之進からは間接的な指導を受けた。彼が学んだのは朱子学の新註で、学が進むと幕府の法令・通達と藩制について学んだ。修身齊家治国平天下というのは、いわば為政者の治世道德の理念である。儒教の根幹である治世理念を、現実の政治にどのように当てはめ運用するか、という観点がはつきり見えてくる選択と云える。十五歳からはこれも藩の規則に従い、日新館において弓馬槍刀の武術を学んだ。同じ頃、高津平蔵に師事して作詩を学ぶことになったが、入門早々彼が作詩した習作を高津に見せたところ、まだ早いと突き返されたというエピソードが伝えられている。詩文の製作が純粹な芸術として評価されるのではなく、制度として形式を重んじることになっていた弊害を如実に示しているといえよう。

尚書塾は、素読中心で、入門期の四等から三等、二等、一等と課程を順に進級してゆく。必ずしも在籍年次・年齢には関係なく、修了認定されれば先に進むことが出来た。その上には、さらに、会津藩において大学校と称されていた講釈所があり、ここでは日々儒者から親しく教えを受けることができた。講釈所には下等、中等、上等の差があり、中等、上等は江戸に出て学び、得業と認められれば邸学で受験すると認められれば、資格に拘わらずさらに上級の学校に進学することが出来た。悌次郎は秀才を認められて講釈所に進学、天保十三年（一八四二）四月、藩の給費生として初めて江戸に出て、江戸藩邸の成章館において藩儒牧原只次郎から親しく経術を学ぶこととなった。時に悌次郎十九歳、ここで彼は、激動のつば江戸においてこれまで

とは全く異なる世界と向き合うことになった。

四

この年七月二十四日、幕府は異国船打払令を改め、薪水食料の給付を許可している。世界に目を転じると、一八四〇年（天保十一年）に勃発したアヘン戦争がこの年終わり、清とイギリスとの間に、香港割譲などを定めた南京条約の調印されたのがちょうどこの頃のことである。（条約締結は、太陽暦八月。和暦に換算すると、八月は、六月二十五日から七月二十六日まで。）鎖国を堅持しようとする幕府の政策に破綻が見え始め、海防に対する関心が高まり、対外関係の枠組みをどうするのか、議論が沸騰しているまっただ中に彼はやってきたのである。

十月、彼は番町三丁目谷にあった麴溪書院に入学、そこで悌次郎は学僕としてひたすら儒学の研鑽に励むことになる。麴溪書院は、服部栗齋が、宋学教授のために開いた学塾で、服部栗齋、桜田周助（虎門）と続き、この頃には幕府教授所附儒官慎齋松平欽次郎が院長として、崎門学を授けていた。時代の変化とは全く関係ない、確乎たる儒学の体系の教授が行われていたのである。

この時代、書生たちは、儒者同士の人的ネットワークを利用して、交流を重ねていた。後年、熊本の第五高等学校教授時代のことだが、彼が学生の自宅を訪れた際、藤田東湖の軸を見せられ、学生の父親がその書にあった書き誤りを話題にした。この時彼は、「この書き誤りは東湖の癖で、自分が十九歳の頃東湖の元を訪れた時、東湖の揮毫を手伝われた。席上揮毫の間違いを指摘したら、東湖がそうだったとあって悌次郎の言い分を認める添え書きをしたことがある」といったというエピソードが、『秋月先生記念』に伝えられている。これはちょうどこの時代のことである。時に東湖三十七歳、悌次郎の、一字一句をおろそかにしない才気走った若者ぶりに対して、その指摘をお

おらかに受け入れる東湖の人柄をうかがうことが出来る、彼の思想形成に関わるエピソードとして注目される。

五

江戸に留学五年、弘化三年（一八四六）、二十三歳の時ようやく昌平坂学問所書生寮に入ることができた。入齋にあたっては、始め幕府の儒官古賀小太郎の門人となり、後大学頭林壮軒の門人となっていた。これは幕府に仕える儒学者の中に主たる師を持っていないと入齋を許されないという規則があったからである。弘化二年には、会津藩士長坂常次郎（後の小笠原午橋）、同四年には南摩羽峯が、古賀門として同じく昌平齋に入校している。長坂は悌次郎より二歳、南摩は一歳それぞれ年長である。同じ古賀門から、嘉永元年には薩摩藩士重野厚之丞（成斎安釋）が入齋している。悌次郎より三歳年下である。藩からの奨学金が多少あったとは云え、丸山家の二男として秋月を名乗ったものの、生活の道が全くないまま書生暮らしをしていたのだから、家族はもちろん本人もほっとしたことだろう。林家の入門名簿「升堂記」弘化四年の条に、大学頭側齋林壮軒の門人として、松平悌次郎の紹介により松平肥後守家来秋月悌次郎が、五月六日に入門したとの記録が残されている。^{注4}

書生寮の定員は四十数名。森銃三によれば、寮は南北二寮があり、部屋は八畳と六畳に分かれていた。八畳の間には三人、六畳の間には二人が入った。北寮には食堂、会堂、厨房、浴室があり、食堂は輪講、解読の会場にも用いられた。書生寮は自治制で、学業に秀で徳望があつて在寮期間の長い年長者が舎長に任命され事務を取り仕切り、北寮の六畳一間に独居することが出来た。舎長を補助する助勤（助役とも）が二名、別に経義掛、詩文掛がおかれた。舎長には五人扶持、助勤には三人扶持が給された。炊事夫が二人おり、生活費は寮生が当番制で記帳して月末に決算することになっていた。課業は定例の儒官

による講義の外は、寮生同士が輪読、解読をする決まりで、図書は、齋の蔵書を貸出日に借り出す、外出は月に十回などの規則があつた。在学期間は原則一年、継続したいものは改めて在寮願いを出す必要があつた。三年以上在寮したものには、三十日の休暇を取ることが出来た。入寮者の大多数が藩の給費生だったため寮内ではそれぞれが自然と藩代表のような形となつて、多様な人間関係を結ぶ元となつたのである。（中央公論社版『森銃三著作集』による。）

嘉永三年（一八五〇）、在寮四年にして彼は書生寮舎長助勤に任命され、三人扶持を支給されることとなつた。藩から支給される奨学金以外に給付されるこの給付金は、諸生の身にとつては過分といえるもので、入寮の翌年父を失い兄胤昌の居候となつていた彼にとつては、非常にうれしいことだつたに違いない。

六

昌平齋における悌次郎の勉学態度については、同じ頃昌平齋に学んだ鹿門岡千仞の『在臆話記』に証言がある。岡千仞は、天保四年（一八三三）生まれ。仙台藩士岡義治の五男、いわゆる諸生身分で悌次郎と同じ境遇である。悌次郎が在寮中の嘉永五年（一八五二）昌平齋に入齋している。以下彼の著になる『在臆話記』の記事を見てみよう。（『在臆話記』第二集巻八。）

吾入寮ノ時、長坂常次郎後二小笠原午橋舎長、一柳健之助、秋月悌次郎助勤、羽峯、成斎詩文掛タリ。一柳退寮、順ナレバ羽峯助勤ナルニ、羽峯、長坂、秋月、皆会藩ナレバ、成斎超任。

岡の入齋時の舎長は、長坂常次郎（会津藩・後の小笠原午橋）、秋月悌次郎は一柳健之助（小松藩）と共に助勤であり、詩文掛に南摩羽峯（会津藩）、重野成斎（薩摩藩）がいた。その後、一柳が退齋した時、順番では南摩羽峯が助勤になるはずだったが、長坂、秋月、南摩いずれも会津藩出身だったため、重野が南摩を超えて助勤に任じられ

七 た。

一方彼の学問にたいする姿勢について千仞は、次のようにいう。

秋月草軒、其学（筆者注、崎門学のこと。）ヲ熱信、会日ニハ必
通学、経書会ハ四書ノ一字一句、甲是乙非、瑣末ノ字義ヲ講究ス
ルヲ学問ト為ス。此時ニ芸藩ノ金子某ト云フ経学家、芸邸ニ勤
番、会日ニハ重野ヤ秋月ヤ森衣閑ヤ四五人ニテ霞閑マデ通学、其
著四書帛言ト云フヲ借写ス。四書ニハ各家ノ末疏アリ。会津ノ安
部井襲ノ四書輯疏新刻、諸人、会藩人ニ囑シテ購求、毎会、文義
ノ難問紛出、議論ト為リ、ソノ能ク弁晰明了トナルヲ学問ノ本業
ト心得。余ハ藩三回ノ落第二懲り、四書ヲ手ニセザルコト、為
シ、在寮間、経会ニ列セシ事ナシ。唯、助勤ト為ル以上、一会ハ
会頭セネバナラヌ例ナレバ、孟子講会ニ列セシノミ。

これは、岡千仞が助勤になった時のことをも踏まえて書かれている
ので、状況を整理する必要があるのだが、彼の眼に映った悌次郎は、
山崎闇斎の唱えた崎門学の熱心な信奉者で、四書五経の講書の日に
は、必ず出席して本文の一字一句についてこれまでの注釈を吟味して
内容を細かく規定するという訓詁注釈を学問の本道としていた。た
また当時江戸の安芸藩邸に金子霜山という経書学者が勤番していたの
で、そこに重野成斎や悌次郎、森衣閑など有志が出掛け彼の著書『四
書帛言』を借覧して書写した。それとは別に、会津藩士安部井冒山の
著作である『四書輯疏新刻』を、会津人のもつてで買い求め本文読解を
進めたが、読むたびに文義を巡って議論百出、そこで明晰に弁じるこ
とが出来たことを学問だと認識していたのである。こうした悌
次郎の傾向に対して岡は、自分は藩での四書講読の進級試験に三回落
第してことに懲りて、こうした訓詁注釈学の研究会には一度も出席し
なかつた。ところが、助勤は必ず一度はレポーターにならなければな

らないという決まりがあり、たまたま助勤に任じられた時やむなく孟
子の講読会に出席したことがあるだけだということのである。ここには、
訓詁注釈学に対する両者の姿勢の差が見られて興味深い。

八

日常座臥の彼の生活態度はどうか。『在臆話記』巻五、安政二年八
月の記事中に、重野安繹と悌次郎が岡千仞を藩邸に訪ねたところ、不
在だったため父が応接したと記した後、次のように記している。

此時草軒、成斎ノ後ヲ承ケ舎長ト為ル。吾、草軒ト同寮スル、未
ダ嘗テ其藤上ニ安眠スルヲ見ズ。終夜灯下ニ看書、倦メバ則案上
ニ眠ル。其刻苦知ルベシ。能ク人ノ為メニ周旋、勞ヲ厭ハズ。成
斎評シテ曰ク、草軒ハ苦学シテ学問ノ妙味ヲ解セズ、世事ニ敏ナ
ルモ俗気厭フ可シト。会藩、神田孝平ヲ聘シ、欧学ヲ開ク。羽峯
退寮シテ就キ学ブ。不レ幾シテ孝平、開成校教官ト為ル。羽峯ハ
西国訪歴、成斎、羽峯ヲ評スルニ、好人物大略ナシ、老婆ノ絮談
尤モ厭フベシト。

悌次郎と同寮した岡千仞が見たのは、刻苦精励、夜は灯火のもとで
学業に励み、机に向かったままで眠り寝具で安眠することがなかった
という彼の姿である。人のために尽力を厭わないという、悌次郎の誠
実な姿を千仞は捉えている。ところが、こうした点を捉えて重野安繹
は、苦学していて学問の妙味を味わうという境地にはない、世事に敏
感で俗気がありすぎると、きびしい評価をしていたという。

悌次郎の苦学ぶりについては衆目の認めるところであった。南摩羽
峯の起筆になる彼の墓碑銘（『草軒遺稿』）には、

其在昌平爨。燭以繼晷。終夜兀兀。或凭几而眠。覺則又読。人不
見其就枕。深信程朱之学。最長経世。若文詩則其緒余。然亦往往
有足感動人者。処事果斷。雖当難局。夷然無遲疑之色。嘗曰。経
世之術必原諸性命之微。性命之微必發諸治国之用。則学不陷于理

窟。治不流于覇術。嗚呼此數語足以知子錫本領矣。
とある。

子錫は悌次郎の雅号の一つである。昌平齋在龔中彼は、日が暮れたら灯りをともして夜もすがら勉強にいそしみ、眠くなればそのまま机にもたれて眠り、目が覚めればまた読書が続ける。人は彼が寝具で寝ている姿を見たことがない。深く程明道朱子の唱えた儒学を信じ、とりわけ経世の学にすぐれていた。詩文の奥義を究めたとは云えないが、人の心を感動させる作品をものすることが多い。果断に事を処理し、難局に際会しても遲疑逡巡することはない。かつて彼は、経世の術は、性命の微を原とし、性命の微は必ず治国の用となる。学べば理窟に陥ることを免れ、治が覇術に流れることはない。この数語の中に彼の本領がある。

おおよその意味はこういうことであろうか。岡千仞の捉えた風貌と一致するところが多い。

九

己をきびしく律した悌次郎は、当然のことだが他人についても規律ある行動を求める。安政元年（一八五四）二月、重野安繹が舎長、悌次郎が助勤だった時のことである。直情径行型の松本奎堂（刈谷藩）が、大郷卷蔵（鯖江藩）の破廉恥を怒り暴行するという事件が起こった。義は奎堂にあるが、先に手出しをしたのは彼である。舎長の重野安繹は、秋月と謀り、やむなく奎堂を退寮させたが、同時に卷蔵も退寮処分とした。このことなどが、先に見た重野安繹の悌次郎評になっているのかも知れない。

同じ年の閏七月二十二日、悌次郎は重野安繹の後を受けて、昌平齋の舎長となる。岡千仞は、先に見た成斎が羽峯を超えて助謙に任じられたと記した後、

長坂退職二決、成斎才名一時ヲ圧スルヲ以テ、秋月ヲ超ヘテ舎長

トナル。未^二一年^一、成斎不次拔擢セラレ、世子侍読トナリ、秋月、舎長トナル。

と書いている。長坂が会津藩日新館教授として迎えられたため退職した時には、重野の盛名才能が擢んでいたので先任の悌次郎を超えて重野安繹が舎長に任命された。ところが、重野が舎長になってまだ一年もたっていないのに薩摩藩公の跡継ぎの侍読に抜擢され退寮することになったため、悌次郎が舎長に任命されたという。（悌次郎の舎長就任記事は、「安達清風日記」にもある。）嘉永六年（一八五三）彼は三十歳になっていた。先に記したように、舎長になると一室に独居、五人扶持を給付される。助勤時代よりも豊かな生活が保障されることとなったのである。

十

『在臆話記』の記事をさらに見てみよう。

秋月ハ麴溪書院ノ食客^トナル。藩、其苦学ヲ嘉シ、学資ヲ賜ヒ、聖堂ニ入寮、後、助勤ト為リ、学資以外ニ二口俸ヲ食ム二年余。成斎ノ後ヲ承ケ舎長ト為リ、五口ヲ食ム二年余。我藩ナドニ番士四口ヲ並身代ト為ス。一書生ヲ以テ、藩給学資外ニ、前二三口、後二五口、前後四五年ニ亘ル。人誰不^レ欲^二富貴^一。独於^二富貴^一私ニ壟断、居^レ之^レ不^レ疑ハ、負且乘、致^二寇至^一、固其理力。韋軒ハ会人ニテ、悪衣菲食、廉潔儉約ハ本領ナルニ、加藩新刊ノ欽定四経、水戸諸儒新刻本始メ、坐右為^レ堆。書生ノ得意ヲ示シ、外警以来、武具大流行、薩摩ニ古来革具足アリ。在邸ノ坊主大山円阿弥^{大助}ト云異様ナル奇人アリ。此時、聖堂ニ擊劍盛行、時々同藩人ヲ来訪、衆ト闘ハス。此人革具足製造方ヲ伝フト聞キ、韋軒、書生不似合ノ黄白ヲ投ジ、円阿弥ニ製作ヲ頼ミ、如何ニモ薩ノ尚武国ニ伝ハル世間無類ノ堅牢美麗ナル新製甲冑ヲ舎長寮ニ飾リ、在寮満員ヲ会集、茶菓ヲ供シ、時節柄、武備談ナリ。此ハ尚武ノ

本心ヨリ出デタルニセヨ、諸藩屈強書生ハ内心嘲笑。且幾年トナク一貧生、不相当ノ官俸ヲ貪リ、彼取而代ハルベキ野心者、妬心者、口賞腹誹、紛々悪評トナリ、竟ニ恋々五口、不能^レ決去^一、
 岡上落書トナリ、韋軒進退維谷^{ジキタル}ノ窮途ノ阮籍トナル。

岡の述懐を見ると、寮生にとつて助勤、舎長に任命され扶持米を支給されるということが如何に大きな意味を持つかが分かる。仙台藩では番士の一般的な俸給が四人扶持である。ところが、昌平齋では、助勤に三人扶持、舎長には五人扶持が給される。藩からの奨学金で苦学している諸生身分の学生は、昌平齋を退寮すれば、親がかり兄がかりで生計のめど立たない一介の居候でしかない。そういう境遇の中で前後四、五年の間三人扶持ないし五人扶持を得ているとなると、それは「富貴をひとりじめに」するものだと岡はいう。刻苦精励の結果評価されてその役職に抜擢されたのだから、誰にも文句を言われる筋合いはない。ところが、そういう境遇が数年の間続くと、いつの間にか同輩・後輩からのねたみ・やつかみ、痛くもない腹を探られての誹謗中傷の的にされるといふことである。韋軒は、会津出身で粗衣粗食（悪衣菲食）清廉潔白、儉約を本領としていたが、役料を支給されるようになってからは、加賀藩が出版した『欽定四経』、水戸の儒官の新著を始め座右に買い求めた書物をうずたかく積み上げた。貧しい書生には出来ないことで、これが如何にも得意そうに見えたというのである。助勤時代から舎長時代にかけての数年間の倅次郎が、周辺からどのように見られていたのか、その辺りの事情を、岡千仞は細かに伝えている。

十一

この時代は、外圧が厳しくなって自衛のための武備が大流行していた。薩摩藩は古来革製の具足が有名だった。当時薩摩藩邸に茶坊主の岡阿弥大山格之助（大山綱良。後に鹿兒島県令となり、西郷軍に荷

担、長崎で切られた。）という変わった男がいた。時に昌平齋の寮生の間では撃剣が盛んで、彼は時々薩摩出身の寮生を訪ねてきては技を競っていた。倅次郎は彼が薩摩ふう革具足の製造法を伝えていると聞いて、諸生には不釣り合いな大金を投じて彼にその製造を依頼した。出来上がった革具足は堅牢美麗、薩摩の尚武の伝統を伝えるみごとなものだったが、彼はそれを自分の居室に飾り、寮生全員を集めて茶菓を出してお披露目をし、時節柄武備談話を催した。これは倅次郎の尚武の気持からでたものであったにせよ、各藩から選抜されてきている屈強な書生一同内心では嘲笑していた。ながらく貧窮の生活に慣れていたものが、不相応の俸給を得たからこういうことになる、彼に取って代わろうとするもの、やつかむものたちは、表面きは結構ですぬといいながら腹の中では馬鹿にしていたのが、終に表面化して、トイレに「恋々五口、不能決去」（五人扶持に未練があるから、卒業したくないのだろう。）等という落書を張られる騒ぎとなって、進退ここに極まったと。本人は何か特別のことをしたという意識は全くないことであっても、同寮生の目には、それが彼の奢りとして見えてしまうこともある。永く続いた寮生活、一旦その席に附いたらその立場にしがみつく、傍から見ると、そんな風に見える。ここにはいつに時代にも変わらぬ競争社会に生きる人間の現実がはつきりとらえられている。

こう記した後で岡はさらに次のように続ける。

午橋も羽峯も古溪も、吾ト同一冷飯ナリ。^{スネカカリ} 軒噓ナリ。辛勤一経ヨリ儒員拔擢、別為^一一家。何レノ藩ニテモ芥ヲ拾フ如クナラズ。午橋ハ舎長ノ角ニテ拔擢、羽峯ハ助勤途塞リ、欧学トカ。コレモ半途、八方游歴ナリ。

舎長となると世間にその才学が認められて、藩の儒学者に拔擢されるなど、立身の道が開けることになる。長坂（午橋）しかり、重野し

かり、重野に先を越された南摩は、悌次郎が舎長に任命され儒者としての栄達の道がほぼ途絶えたため、方向を変えて洋学に転じた。（彼は、八月十二日に退寮している。南摩綱紀は、安政四年日新館内に洋学部門が設けられると、蘭語担当の蘭学所教授としてなっている。同じ時採用された人に、山本覚馬がいる。）寮生の間には、自分たちの将来に関するこうしたわだかまりが、陰に陽に渦巻いていたのである。

十二

この辺りの事情については、岡千仞自身が自分の経験を記しているので紹介しておこう。彼が、古溪、樹堂の後を受けて助勤になったとさきのことである。安積良齋が、彼の貧窮ぶりを見かねて、仙台藩に奨学金の支給を働きかけたという。良齋の働きかけがあったため彼は首尾能く游学中という名目で三人扶持を臨時支給されることになった。

官俸ヲ并算スレバ六人扶持ナリ。襲_レ古溪後_一為_二舎長_一、并算八人扶持ナリ。我藩ニテ四人扶持ガ卒士ノ常禄ナルニ、一書生、他ノ家累アルニ非ズ。一朝八人扶持トナル。此章軒ノ五口悉々ノ落書ヲ来セシ所以ナリ。

藩から特別に三人扶持を支給されたため、助勤時代は六人扶持、後に舎長となった時にもこの支給は継続されたから合算すると八人扶持になる。仙台藩では卒士の俸給は平均四人扶持、それで一家を支えているのに、書生で何の係累もないから八人扶持は非常に裕福で余裕がある。章軒の話はもつともなことだと彼はいう。そうして、

在聖堂六七年間、一寒生、書籍一部購入セズ。此ニ至り、神明前書肆内田屋此老人可_レ談珍書アレバ、傾_レ俸購求。第一二桜純蔵ニ就キ新板ノ日本史ヲ買ヒ、坐右ニシ、同窓諸友ニ貸ス。新刊ノ訳書、瀛寰志略、地理全志、聯邦志略、合信氏ノ医書、一々購求。此事ノミハ、真_二天堂_一ニ上リシ心地セリ。

学生時代には書籍を買う余裕など全くなかったが、こうなると、神明前の書肆内田屋により、珍しい書籍があればともかく購入した。新板の日本史を坐右において、同窓諸友に貸し、「瀛寰志略」、「地理全志」、「聯邦志略」、合信氏の医書等を手当たり次第に買い求めたという。この時の気分は、まさに「天堂ニ上リシ心地」だという。彼も悌次郎と同じように書籍を購入しているのである。

舎長になった時彼は、寮内の弊風を打破せんとして改革を進める。ところが寮生の反発を受け、悌次郎の時と全く同じ貼り紙をされ、即日退寮を決意したという。こうした貼り紙が、寮生の間で何かある時の不満のはけ口となっていたことが分かるエピソードである。

十三

貼り紙事件で岡千仞に「進退^{ジキハク}維谷ノ窮途ノ阮籍」と評された悌次郎だが、彼は舎長を辞任するということはなかった。その後も黙々として学業にいそしんだのである。

彼が己を律すること如何にきびしかったかということを示す別のエピソードがある。岡千仞の『劄記続筆』の中に、

秋月章軒（胤永、子錫）宋学ニ覃精シ、制行極テ嚴ナリ。常ニ曰ク、余游学十余年、人情世態、備サニ辛酸ヲ嘗ム。而シテ足游里劇場ヲ踏マズ。此レ学ブ所ニ負ハザル者ト。帰省休暇、越後ニ游ブ。皆曰ク、新潟ハ北陸ノ揚州、恐ラクハ子錫其ノ介ヲ保ツコト能ハザラムト。其ノ寮ニ帰ルヤ、首ニ新潟ヲ問フ。詩ヲ示シテ曰ク、

客窓行囊伴寒弊。打岸潮声和管声。
自笑楼々歌吹海。此間無地著経生。

其ノ性行知ル可キ也。

とあるのがそれで、悌次郎は江戸に遊学すること十余年、常に学問には関係ないから遊里劇場に行ったことはないといっていた。たまた

ま彼が休暇で新潟に出掛けたことがある。新潟は有名な遊興の町である。如何に悌次郎でもその土地の風習には逆らえまいということ、帰寮した時新潟での首尾を尋ねたところ、彼は次の詩で答えた。

客窓行囊伴寒檠。打岸潮声和管声。

自笑楼々歌吹海。此間無地著経生。

この詩は、『韋軒遺稿』中に一部改作の上「新潟」という題で、安政三年の作として収録されている。

旅窓繡帙対孤檠。波浪声交糸竹声。

自笑北州歌吹海。紅樓無地著経生。

旅寝の宿に聞こえてくる遊興の巷のざわめきや音楽を、自分には全く関係がないと聞き流している悌次郎の姿がよく読み取れる。安政二年秋十月、安政の大地震により、昌平饗は全焼の憂き目に遭っている。「寒檠」（寒灯に同じ）とあるから、翌春早々ということだろうか。この辺りは、一弦琴をよくして自ら古歌を歌い、謡曲をたしなんだという重野安繹の余裕とは異なる悌次郎の性向が読み取れる。岡千仞が伝える、重野安繹が「韋軒ハ苦学シテ学問ノ妙味ヲ解セズ、世事ニ敏ナルモ俗気厭フ可シ」といったという理由がよく分かるエピソードである。

十四

安政三年といえ、彼が昌平饗を辞する頃と重なる。彼が退寮した正確な年月は今の所不明である。秋月胤徳の編になる年譜では、「安政三年（一八五六）丙辰 書生寮舎長を辞して退く。勤中の功勞を賞し、官版五部を賜う。」とあり、安政三年、新潟紀行から戻ってしばらくして退寮したということかと思われる。森銚三の「秋月韋軒」は、退寮を安政四年のこととしている。（ただし、森銚三は『松本奎堂』では、安政四年奎堂が、秋月悌次郎以後、葛西処一、続徳太郎の後を受けて舎長となったとしており、これだと悌次郎の退寮は安政三

年のことかと思われる。）この辺りが判然としないこと自体、彼の修行の在り方を暗示していると云えそうである。先にも記したように、昌平饗には、一定のレベルまで達したが故に「卒業」させるといふ概念がもともとなかった。藩で定められた留學年限がある場合にはそれに従い、それが無い場合には願い出て許可されれば延長が可能というシステムだったから、何時までもそこに留まるということが起こるわけで、悌次郎に向かってなされた貼り紙の意味も分かるのである。

こうした彼の歩みを、彼の周りにいた人達はどう見ていたか。岡千仞の証言を見てみよう。

韋軒ノ事、此クノ如ク序シ去レバ、半文錢中ラズノ人物ト為サシ。韋軒ハ書生中ノ傑出人ニテ、宋学ヲ篤信、鈍根ヲ励マシ苦学ニ堪ヘ、事ニ処シテ周到、情理ニ行涉リ、後輩新進ヲ奨励、人ハ佞諛トカ陰險トカ評セシニ、所見ハ諤々論争、事ニ当リテ毅然奪フ可カラズ。彦老校田騷動ノ時、藩君ヲ見テ傍觀ノ理ナキヲ論陳、身ヲ挺シ水戸ニ使シ、武田耕雲、原仲寧ヲ見テ大難ヲ弔シ、善後ノ策ヲ議シ、守護職ハ蝦夷地代官中ナルニ、手代木一同上京、鳥羽伏見ノ兵燹間奔走、若松圍城ノ時、降伏謝罪ハ此人ノ手ニ成ル。仙台米沢ヲ説破、奥羽連盟モ此人帷幄ノ籌策ニ出デタルナラン。午橋、羽峰モ此風雲中ニ在リテ何事ヲ成ス。吾ハ四十年間ノ熟友、始終往復セシニ、吾ガ肩ヲ敲キ、岡ヤ、我奥羽人ハ上国人ニ比スレバ、何ダカ五味垢クサキ臭氣アルヲ覚ユルト。韋軒ハ辛酸艱難ヲ嘗メ尽シタル人ナレバ、此一言、我奥羽人ヲ評シ得テ、如何ニモ同感ヲ覚ユルナリ。

「恋々五口」のエピソードを記した後、岡はこのように記している。生活が楽になったからといって、書生の榮華を見せびらかすかのような振る舞いをして、他人のあざけりに堪えてまでその境遇を守るといふ生き方をする彼は、どうしようもない厭な奴と人はいいかも知

れない。だがそれは違ふと岡はいう。彼は宋学を熱烈に信じる苦学生で、努力の人である。問題を処理する際は情理兼ね備えた裁定をし、後輩や新進を援助する。中に彼のことを上の人にへつらいこびる厭な奴、陰險な男などというものもあるが、彼は自分の意見を整然と述べて相手を説得、断固たる態度で事態に対処する。千仞はこう述べた後で、以後の彼の働きについて、桜田門外の変の折り水戸藩に使者に立った時のこと以下、蝦夷に左遷された時呼び戻されて事態の打開に奔走したこと、若松籠城の際には降伏の使者に立ち、開城にこぎつけたことなど、奥羽連盟結成に到る事態の中で、小笠原午橋も南摩羽峯も彼のような働きは何もしていないと断定、彼を高く評価している。そうして彼はいう。自分は四十年來の親友である。悌次郎が彼の肩をたたいて、「岡君よ。自分たち奥羽地方出身者は、上方の人間と比べてなんだかほこりっぽくて垢抜けしないところがあるよなあ。」と、こういった。悌次郎が、生きてゆく上で辛酸艱難を嘗め尽くした人間だからその一言で、本当にそのとおりだと自分は思う。彼はこの話を結んでいる。後年の悌次郎の軌跡を要約した上での人物評であるが、書生時代の悌次郎を彷彿とさせることばであるといえるだろう。

十五

藩政における儒学者の役目は単純化していえば、藩主の施政に対して助言するという点にある。悌次郎には、自らが国の形を考える、言い換えれば志士として今いる世界を飛び出すという発想はなかった。「治世の能臣」であることこそが彼の目指した人生だったといつてよい。儒学にこだわる限り彼には、藩に働きかけ、藩からの要請を待つ以外に自分を活かす方法はない。だから退寮した後彼に次なる生計の道があったわけではない。彼の残した足跡を見ると、安政六年（二八五九）二月、彼は、安政四年一月下旬より学んだ華岡流整骨術

の図録を作成している。（『日本整骨医学史』）彼は退寮後、華岡流の整体術を学んでいることが分かるのである。これも生計の頼りとしての技術習得だったのだろう。こうした苦しい生活の中で彼はさらに諸国巡歴を藩に願ひ出た。さらなる飛躍を図ったということである。

注1 五八郎は、胤昌嗣子四郎右衛門胤孝。（『会津藩庁記録』）

注2 松平春嶽の側用人だった中根雪江が、公用方となった悌次郎と始めてあった時の評言。

注3 以下『在臆話記』の引用は、中央公論社版『随筆百華苑』所収本による。

注4 林壮軒 文政十一年（一八二八）江戸生まれ。名は健。字は寧卿。別号に憫齋。林檎宇の子。弘化三年（一八四六）林家十代をつぎ大学頭となった。嘉永六年（一八五三）死去。二十六歳。

注5 岡千仞は、文久元年大阪で松本奎堂等と双松岡塾を開いて尊攘論を説き志士と交わり、文久三年仙台に戻り慶応二年養賢堂指南役に抜擢された。戊辰戦争の際には奥羽列藩同盟に反対して一時期投獄されていた。明治三（一八七〇）年大学助教となり東京へ出る。その後東京府学教授、修史館出仕などを歴任し、明治十三年官を辞し私塾綏猷堂で教育と著述に専念した。大正三年（一九一四）歿。

この項了

二〇一四年五月二十一日